DYNAMIS, 4 (2000), *1–33*

『カレ』の語史とその周辺[1]

—三人称代名詞が成立するまでのみちすじ—

李 長波

0. 本稿のねらい

指示詞「カレ」と代名詞「カレ」[2]、それに三人称代名詞についての先行研究は管見の限りでもその数は少なくない。中でも、特に廣田(1953)、奥村(1954)、清水(1959)、堀口(1982)などは示唆に富む。本稿も「カレ」の語史をたどる限りにおいて、これらの先行研究とその歴史的な視点を共有する。しかし、幕末・明治時代の西洋語の翻訳を視点に持つ廣田(1953)と、明治時代の言文一致運動との関わりや現代語の三人称代名詞「カレ」の定着過程に焦点をしぼった奥村(1954)に対し、本稿はもっぱら上代から近世後期までの「カレ」の語史を対象とする。これは清水(1959)や堀口(1982)の立場とも一部重なるが、両者が等しく和語を中心に扱い、しかも日本語内部の問題として処理したのに対し、本稿は、中国語史との関わりの見地から、「カレ」の語史とその関連事象を通して日本語における三人称代名詞の成立をたどるものである。

1. 古代中国語の指示体系と三人称代名詞

古代中国語の指示体系については、一般的に、近称「此(斯・是・惟)」と遠称「彼」にまとめられるが、「其(之)」の扱いをめぐっては諸説がある。楊樹達(1920)は「其」と「之」を指示代名詞とするのに対し、王力(1980)は「其(之)」を「人称代名詞」と「指示代名詞」の両方に属するものとして論じるごとくである。しかし、同じ王力(1980)が一方で「『其』が指示に用いられる場合、修飾・限定語(「定語」)に限られ、それは特定の指示(「特指」)であり、近称(「近指」)でもなく、遠称(「遠指」)でもない」(p.278)と述べるなど、「其(之)」と「此・彼」との関係については必ずしも明瞭にされているとは言い難い。本稿は古代中国語の指示体系の全体を論じる余裕を持たないので、論旨の都合上、ここに結論的なことを述べておきたい。

---

[1]本稿は「第六十二回国語語彙史研究会」(平成 11 年 9 月 25 日、於神戸女子大学)にて口頭発表した内容をもとに書き直したものである。発表の際に有益な御教示を頂いた先生がたに厚く御礼申し上げる。

[2]本稿は「指示詞」を、物や事柄を指し示し、「コ・ソ・ア・ド」の語形を共有する一群の語彙を指すのに用い、「代名詞」を専ら人称代名詞の意味に限定して用いる。なお通時的または共時的に用いられる語彙素としての「かれ」、「あれ」を「カレ」、「アレ」と表記し、具体例としての「かれ」、「あれ」と区別した。

古代中国語の指示体系は、「此・其」と「此・彼」という二重の二者関係を持つ体系である。「此・彼」が「知覚対象指示」の「近・遠」に対応するのに対して、「此・其」は、「観念対象指示」の「近・遠」に対応する。そして、人称との関わり方においては、「此」が話し手に深く関わる一人称的な指示対象を指すのに対し、「彼」と「其」は「知覚・観念」の違いこそあるものの、等しく話し手が積極的に関与しない非一人称的な指示対象を指すと考えられる。要するに「一人称対非一人称」の対立である[3]。

古代中国語の人称代名詞については、例えば、「彼」「其(渠)」「厥」「之」などが三人称代名詞とされており、これらの代名詞は明らかに指示詞からの転用を経て派生したものである。因みに、周(1959)によれば、「彼」は甲骨文字や西周金文には見当たらず、古くは東周金文、『今文尚書』、『易經』に1例ずつ、『論語』には3例、『詩經』には多数用いられるという(pp.132-133)。ここに筆者の収集に係る用例を数例挙げよう。

于彼新土。／彼(か)の新土に于いて。(東周金文・盠壺)[4]

六五、密雲不雨、自我西郊、公弋取彼在穴。／六五、密雲なれども雨ふらず、我が西郊自りす。公弋して彼(か)の穴に在るを取る。(易・小過)[5]

疆埸之邑、一彼一此、何常之有？／疆埸の邑は、一彼一此(いつぴいつし)、何の常か之れ有らん？(左傳・昭公元年)[6]

以上が指示詞「彼」の古い例であるが、三人称代名詞に転用した「彼」の用例もすでに『左傳』、『論語』、『孟子』の会話文において認められる。

「彼、君之讐也。天或者將棄彼矣。」／「彼(かれ)は君の讐なり。天或は將に彼(かれ)を棄てんとす。」(左傳・襄公二十七年)[7]

或問子産。子曰：「惠人也」。問子西。曰：「彼哉！彼哉！」／或ひと子産を問ふ。子曰く、「惠人なり」と。子西を問ふ。曰く、「彼(かれ)をや彼(かれ)をや」と。(論語・憲問)[8]

「彼、丈夫也；我、丈夫也。我何畏彼哉？」／「彼(かれ)も丈夫なり。我も丈夫なり。吾何ぞ彼(かれ)を畏れんや。」(孟子・滕文公上)[9]

---

[3]古代日本語の指示体系については、拙稿(1998)、拙稿(1999a)を、古代中国語の指示体系については、拙稿(1999b)をそれぞれ参照されたい。「非一人称」という用語は R. Jakobson(1942)に基づく。それによれば、ギリヤーク Gilyak 語の動詞形は、一般に人称も数も区別しないが、「中性的叙法(neutral moods)では、単数の一人称と非一人称を対立させている。そして、「一人称対非一人称」(first person vs. non-first person)の対立を示す現象は、ルオラヴェトラン語族(Luorawetlan Languages)に属する諸言語では頻繁に観察されるという(p.617)。

[4]容　庚編、張振林、馬國権補『金文編』中華書局(1985 年)209 頁。

[5]訳は『易經(中)』今井宇三郎校注、新釈漢文大系 24、明治書院(1993 年)を参照した。

[6]訳は『春秋左氏伝 (三)』鎌田　正校注、新釈漢文大系 32、明治書院(1977 年)を参照した。

[7]訳は『春秋左氏伝 (三)』鎌田　正校注、新釈漢文大系 32、明治書院(1977 年)を参照した。

[8]訳は『論語』吉田賢抗校注、新釈漢文大系 1、明治書院(1960 年)を参照した。

[9]訳は『孟子』内野熊一郎校注、新釈漢文大系 4、明治書院(1962 年)を参照した。

ここで、「彼」の用法を整理すると、次のようになる。

A. 指示詞：

a. 単独用法

①物指示

②事柄指示

③場所指示

b. 連体詞的用法

①前方照応的用法

②後方照応的用法

③談話以前の経験や観念的な対象を指す用法[10]

B. 三人称代名詞的用法

しかし、この三人称代名詞の「彼」は、隋から初唐にかけて「他」に取って代わられ、それ以降、指示詞「彼」の用法とともに一部の漢訳仏典や擬古文などに限られるようになる。その一方で、現代まで用いられ続けている「他」は初唐から盛唐にかけて成立したとされている。この説は王力(1980)[11]、唐作藩(1980)、郭錫良(1980)などによって広く認められている。ここで「他」の語史を整理すると、凡そ次のようになる[12]。

① 先秦時代の中国語では、「他」は「(話題になっている)あるものを除いたそれ以外のもの」を意味する名詞であった。

②両漢から魏晋南北朝、隋にかけて、「あるものを除いたそれ以外のもの」を表す用法に人を指す用法が加わり、一人称的なものに対する非一人称的なものを指すとともに、「自分(一人称)」に対する「ほかの人(他人＝非一人称)」をも指すようになった。

③ 初唐から中唐にかけて、「ほかの人(他人＝非一人称)」を指す用法から、一人称と二人称に対するところの特定の第三者（三人称的なもの・人）を指す用法が生まれ、「他」は男・女、人・物を区別しない三人称代名詞の地位を獲得した。

以上は「彼」と「他」の語史の大体であるが、以下、古代中国語の指示詞「彼」及び三人称代名詞「彼(他)」と日本語の指示体系及び人称代名詞との関わりを見てみたい。

[10]例えば、「嘯歌傷懷、念 彼碩人。」(詩・小雅 白華)がその例である。「碩人」は朱熹『詩集傳』に「尊大之稱、亦謂幽王也」とあり、高貴な身分の人の意で、実際は周の幽王を指すようである。しかし、この「彼碩人」は先行文脈の名詞句を受けていないので、文脈的な支持を必要とはしない。その意味で、いわゆる文脈指示の前方・後方照応的用法と異なる。しかも「彼碩人」は「念」(想う）の対象であってみれば、必ずしも詩を詠むその現場に存在しなくてもよい。つまりいわゆる現場指示とも異なる。因みに、現代日本語の「あの件 はどうなった？」のような場合がこれに当たる。拙稿(1994)、拙稿(1999a)を参照されたい。

[11]初版は 1958 年 4 月。

[12]紙幅の関係で、用例は省略に従う。

2. 万葉集と訓点資料における「彼」の訓法と「カ系指示詞」

日本語と中国語との接触の最初はもちろん文献時代以前に遡るが、仮に時代を上代に限れば、例えば『万葉集』の時代は、偶然にもちょうど古代中国語の三人称代名詞が「彼」から「他」へと交替していく時期に重なる。しかし、例えば、『遊仙窟』の諸本において「他」は等しく「かれ」ならぬ「ひと」と訓まれているように、現存の文献で見る限り、上代人が果たして「他」を三人称代名詞として認識していたかどうかについては疑問が残る。一方の「彼」については、上代人はそれを如何に理解し、使用していたのであろうか。表1は『万葉集』における「彼」の訓法と「カ系指示詞」の語形をまとめたものである。

【表1 万葉集における「彼」の訓法と「カ系指示詞」】[13]

表記	訓みと用例数	固定表現とその用例数
彼	をち：6	をちかた：5；をちこち：1
彼	その：12	彼杵(そのき)：1
彼	それ：3	
彼所	そこ：4	
彼	か：6	かよりかくより：3；かゆきかくゆき：1； かにもかくにも：1；かもかくも：1
彼	かの：1	このもかのも：1
彼	かれ：2	たそかれ：2
加	か：1	かはたれとき：1
可能	かの：1	
可礼	かれ：1	
その他	漢文：12	連体用法：9；単独用法で人を指す例：2；彼我：1；

この表でまず注目すべきは、「彼」に宛てられた訓は「ソ系指示詞」と「カ系指示詞」に渉っていることである。そこで、その用例を見てみると、「ソ系指示詞」の訓を宛てた19例のうち、地名1例(万葉集813番（以下、歌番号のみ記す）：「彼杵(そのき)」)を除けば、「ソノ」の例は全部で11例を数えるが、その中から、337番の「其彼(その)母毛」1例は定訓がないため、また、3303番の「彼(その)山邊」は異本の例なので、暫

[13]データは佐竹昭広・木下正俊・小島憲之(1998)『補訂版萬葉集(本文篇)』(塙書房）を用いて、筆者が集計したものである。

く除くとして、残る9例はそれぞれ1節に示した連体詞的用法の①に属するもの2例、同③に属するもの7例を数えているのが特に目につく。既に述べたように、連体詞的用法の③は文脈の支持を必要としないものであるが、「ソノ」全体の用法が連体詞的用法①の前方照応に偏ることと、「ソ系指示詞」に比べ上代語における「カ系指示詞」の語形が不揃いであるところから推すに、恐らく「カ系指示詞」が生まれる前の「コ・ソ」二項対立の指示体系において、「ソ系指示詞」は観念指示に用いられていた時代の名残と考えて差し支えなさそうである。現にこうした用法は次の平安時代になると、ほとんど「カノ」に取って代わられることになる。次に「彼」に宛てられた「ソコ」の4例(104番:「彼所(そこ) 尓塵家武」、512番:「彼所(そこ) 毛加人之」、2886番:「彼所(そこ) 將障」、4189番:「彼所(そこ) 此間毛」)はすべて前方照応的用法に属し、「ソレ」の3例のうち、人を指すもの(3295番:「彼(それ) 曽吾嬬」)、物指示(3278番:「彼(それ) 乎飼」)、事柄指示(1933番:「彼(それ) も知如」)が1例ずつあり、しかもすべて前方照応的用法のようである。このように、「彼」の訓に宛てられた「ソ系指示詞」の用法を通観するに、それぞれ連体詞的用法の前方照応(「ソノ」:「彼」)、物指示(「ソレ」:「彼」)、事柄指示(「ソレ・ソコ」:「彼」)と場所指示(「ソコ」:「彼所」)の用法を持つことが分かる。人称代名詞へ転用した用法を知らないことを除けば、おおむね古代中国語の指示詞「彼」の用法に重なるものと言えよう。

一方、「彼」に宛てられた「カ系指示詞」の訓を見てみると、「か〜かく〜」の定型表現に用いる6例(131番:「彼縁此依」、138番、194番:「彼依此依」、196番:「彼往此去」、412番:「此方彼方毛」、3886番:「彼此毛」)と「このもかのも」(1809番:「此方彼方」)1例を除けば、残る「かれ」2例は次のように共に人を指す用法のようである。

誰そ かれ(彼) と我れをな問ひそ九月の露に濡れつつ君待つ我れを(2240)

誰そ かれ(彼) と問はば答へむすべをなみ君が使ひを帰しつるかも(2545)

しかし、指示対象の人称に目を転じると、万葉集2240番歌の「かれ」は話し相手である二人称を指し、2545番の「かれ」はその人が現場にいてもいなくても、使いに来たその人という三人称を指すことは間違いない。これに「加・可能・可礼」などの仮名訓を合わせると、「カ系指示詞」の場所指示用法と、連体詞の前方照応的用法(①)、後方照応的用法(②)を知らないことを除けば、物指示(4045番:「可礼」)、人指示(4384番:「加波多例 等枳尓」、2240番:「誰 彼」、2545番:「彼 誰登」)、連体詞の用法③(3565番:「可能 古呂等」)を持つことになる。特に人を指す用法を持つことは人称代名詞への転用を知らない「ソ系指示詞」と対照的である。これで見る限り、上代人は古代中国語

の指示詞「彼」と代名詞「彼」の用法を知っていたようであるが、「カレ」の指示対象が二人称と三人称の両方に渉っているのは古代中国語の人称代名詞「彼」と大きく異なる。実際、古代中国語の「彼」には三人称・人を指す用法こそあれ、二人称的な指示対象を指す用法はなく、したがってかかる用法は古代中国語の「彼」によってもたらされたものとは考えられない。とすれば、これは上代日本語の指示体系の然らしむるところに帰すべき問題でなければならない。つまり、上代語の指示体系と人称との関わり方を示唆する現象として考えるべきもののようである。

上代語の指示体系については、拙稿(1998)、拙稿(1999a)に譲るとして、そこで得た結論をここに引くと、次のようになる。

上代語の指示体系は「コ・ソ」と「コ・カ」という二重の二者関係を持つ体系である。もし「コ系指示詞」が話し手の深く関わる現前の知覚対象を指示すると規定すれば、「コ系指示詞」に対する「カ系指示詞」と「コ系指示詞」に対する「ソ系指示詞」とは一人称の深く関わらない知覚対象と観念対象、つまり非一人称的な指示対象を指すことになる。

つまり、「彼」の訓に「カ系指示詞」と「ソ系指示詞」の両方を用いたことは、「カ系指示詞」を所有することによって、「コ・ソ」という二項対立の体系から「コ・ソ」と「コ・カ」という二重の二者関係を持つ体系へと移行し始めた上代語の指示体系においては、「ソ系指示詞」と「カ系指示詞」は共に古代中国語の遠称「彼」に対応したためであり、人称的にも「ソ系指示詞」のみならず、「カ系指示詞」もまた「一人称対非一人称」の対立において、等しく「非一人称」に属していたためであると考えられる。要するに、「ソ系指示詞」と「カ系指示詞」との対立はあくまで同じく「非一人称」の中における「観念対象」と「知覚対象」との違いに過ぎない。

因みに、ここに言う「非一人称」とは「二人称」と「三人称」が未分化のまま融合していた状態の謂いでなければならない。

しかし、ここで改めて人称をめぐる古代中国語の「彼」と上代日本語の「カレ」の違いを考えてみると、なぜ指示体系において上代語と古代中国語が同じく「一人称対非一人称」の対立をなしているにもかかわらず、「彼」には二人称を指す用法がなく、「カレ」にそれがあるのかという疑問が当然生じる。これについては、恐らく次のように考えることが許されよう。

まずその原因として考えられるのは古代中国語における三人称代名詞の成立が早かったことである。人称代名詞としての「彼」は「非一人称」の指示詞「彼」から転用した

ものには違いないが、それが既に三人称代名詞として成立したとすれば、二人称に関わる用法がないのはむしろ自然のなりゆきといえよう。これに対して、上代語の「カレ」は依然指示詞の範疇に止まり、しかもその人称との関わりも未だ指示体系における人称領域の画定に拘束されているとすれば、「彼」と「カレ」の間には三人称代名詞の発展段階の差があったものと考えることが可能になる[14]。

このように考えると、「一人称対非一人称」という対立を持つ指示体系においては、「非一人称」指示詞から三人称代名詞が派生的に生み出されるためには、まずその前段階として非一人称の指示詞が同じ非一人称の代名詞に転用することを想定する必要がある。そして、その非一人称の代名詞が三人称代名詞に成長するためには、恐らくそれまで二人称と三人称が未分化のまま融合していた状態から、まず二人称を指す用法が消えてしまい、もっぱら三人称を指す用法に収斂されることが前提条件とならなければならない。因みに、古代中国語の「彼」については、上記二点のうちすでに三人称へと収斂されたその結果しか観察されないが、上代日本語の「カレ」はちょうど非一人称の指示詞から非一人称の代名詞に転用されており、しかも現代語にいたるまでの間に三人称代名詞に収斂されてしまったことを考えれば、二点とも裏付けている点が興味深い。

一方、『万葉集』の漢文に用いられる「彼」12例のうち、「此～彼～」2例(871番：「嗟此別易、歎彼會難」、966番：「傷此易別嘆彼難會」)、「彼我」(3973番)1例を除けば、残る9例は、それぞれ単独用法で人を指すものが2例、連体詞的用法の①に属するもの5例、連体詞的用法の③に属するもの2例を数える。この中で特に注目すべきは次の例のような連体詞的用法の①(前方照応)は5例と、全体の半数強を占めることである。

右或有人聞之曰　新田部親王出遊于堵裏御見勝間田之池感緒御心之中　還自彼池不忍怜愛　於時語婦人曰　今日遊行見勝間田池　水影濤々蓮花灼々　何怜断腸不可得言　尓乃婦人作此戯歌專輙吟詠也(3835番)

右、或る人聞きて曰く、新田部親王、堵裏に出遊す。勝間田の池を御見はし、御心の中に感(め)諸づ。その池より還りて、怜愛に忍びず、ここに婦人に語りて曰く、今日遊び行(ある)き、勝間田の池を見る。水影濤々に蓮花灼々なり、何怜きこと腸を断ち、得て言ふ可からずといふ。すなはち婦人、この戯歌を作り、專(もはら)すなはち吟詠す、といふ。[15]

この例の「彼池」は先行名詞句「勝間田之池」を照応していることは言うまでもない

[14]因みに、本稿は、指示体系の存在を前提とする指示詞の代名詞的な用法を、指示詞から代名詞への「転用」とし、既に指示体系の拘束を受けることなく、指示体系から完全に後退したか、又は人称的には指示詞と範疇を別するものの場合に限り、「代名詞」とする。

[15]訳文は佐竹昭広・木下正俊・小島憲之(1972)によるが、漢字の表記は旧字のままにした。

が、筆者の観察によれば、このような連体詞の前方照応的用法の「彼」は皆無ではないが、普通の漢文では使用頻度は極めて低く、逆に漢訳仏典においてその用法が顕著に認められるようである。ここにその一例を示そう。

爾時世尊告阿難言。阿難。我念往昔過於無量無邊阿僧祇不可數不可説劫。是時有一轉輪聖王名曰善見。降伏四方。如法治世。彼王所統。悉皆豐樂。不行鞭杖。亦無殺害。兵戈偃息。如法化人。阿難。彼善見王所居住城。名閻浮檀。其城東西十二由旬。南北面各有七由旬。

阿難。彼閻浮城。清淨莊嚴。殊特妙好。悉用四寶之所莊飾。黄金白銀。頗梨琉璃。其外別更有七重城。彼城皆悉高於七尋。各厚三尋。而彼城頭周匝皆有七重欄楯。彼諸欄楯。雕刻精麗殊妙少雙。(隋天竺三藏闍那崛多譯『佛本行經巻第二・發心供養品中』大正新脩大藏經第三巻本縁部上、659-660 頁)

爾の時、世尊、阿難に告げて言く、「阿難、我、念ず、往昔、無量無邊・阿僧祇・不可數・不可説劫を過ぎて、是の時、一轉輪聖王あり、名けて善見と曰ふ。四方を降伏して、如法に治世す。彼の王の統ぶる所、悉く豐樂、鞭杖を行はざるも、亦殺害無し、兵戈偃息して、如法に人を化す。阿難、彼の善見王の居住する所の城を、閻浮檀と名く。其の城、東西十二由旬、南北の面、各七由旬あり。

阿難、彼の閻浮城は、清淨の莊嚴、殊特妙好、悉く四寶を用て、莊飾する所 — 黄金・白銀・頗梨・琉璃なり。其の外、別に更た七重の城あり。彼の城、皆悉く七尋より高く、各厚さ三尋にして、彼の城頭の周匝に、皆七重の欄楯あり。彼の諸の欄楯、雕刻精麗にして、殊妙雙び少なり。[16]

このとおり、さして長くない文章に幾たびとなく用いられている「彼＋名詞」はすべて先行名詞を受けているが、正格の漢文においては、先行名詞句をそのまま繰り返すかゼロ形式に付すかが通例であることを考えれば、漢訳仏典におけるこのような「彼」の前方照応的用法の頻用は、おそらく中国語の自然発生的な用法というよりは仏典の原語の影響によるものと思われる。一方、日本漢文におけるそれについては、上代語「カノ」(或いは「ソノ」)の自然発生的な用法によるものなのか、それとも漢訳仏典の影響によるものなのかは俄に断じがたい。ここでは漢訳仏典と日本漢文との間の平行的な文体特徴として指摘するに止め、今後の課題としたい。

しかし、先に見たように「彼」の訓に「ソ系指示詞」と「カ系指示詞」の両方が宛てられたことは、ひとり上代の言語資料に限られてはいなかったようである。現に奈良時代から平安初期にかけての言語資料を残しているとされる『類聚名義抄』では、「彼」の訓に「かれ・かしこ・それ・そこ」が挙げられている(佛上三十九の四)のを始め、次の

[16]訳文は『國譯大藏經四十九』所収の常盤大定訳によった。但し漢字の表記は大正新脩大藏經第三巻本縁部上、659–660 頁所収の本文のままにしたほか、振り仮名は適宜省いた。

表2が示しているように、平安時代の訓点資料においても同じ傾向が見られる。

【表2 平安時代訓点資料[17]における「彼」の訓法】

文　献　名	カレ	カシコ	カノ	アレ	アノ	ソレ	ソコ
西大寺本金光明最勝王經	○	○	○	×	×	○	×
石山寺本大方廣佛華嚴經	○	○	○	×	×	○	○
大乘大集地藏十輪經 (巻1、2、4、8-10)	○	○	○	×	×	×	×
大乘大集地藏十輪經 (巻5)	○	○	○	○	○	×	×
法華経玄賛淳祐點	○	?	○	×	×	×	○
興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳	○	○	○	×	×	×	×

表2を通して見るに、全体的に、平安時代の訓点資料では、「彼」の訓に「カ系指示詞」と「ソ系指示詞」の両方が多く用いられているが、時代が降るに従って、「カ系指示詞」が増加し、「ソ系指示詞」が減少する傾向が認められる。これは中古語の指示体系は上代語のあとを受けて、連続的に推移していることを示唆すると同時に、「カ系指示詞」が上代語に比べて著しく発達し、指示体系も「コ・ソ」と「コ・カ」という二重の二者関係から「コ・ソ・カ」という三者関係に向けて大きく前進したことを意味する。

それから、平安時代初期に現れたと思われる「アレ」は既に『大乘大集地藏十輪經第五巻古點(元慶七(883)年點)』において「彼」の訓に用いられたことが注目に値する[18]。これによって「アレ」もまたその文献に現れた最初から、人称代名詞に転用されていたことが分かる。次に中古以降近代に至るまでの「カレ」と「アレ」の用法を見てみたい。

[17]ここに用いた訓点資料の本文と加点時期は次のとおりである。
『西大寺本金光明最勝王經古點(平安初期點)』(春日(1942)による)
『石山寺本大方廣佛華嚴經古點(天安～貞観(857-877)頃か)』(大坪(1992)による)
『大乘大集地藏十輪經古點(巻一、二、四、八、九、十)(元慶七(883)年點)』(中田(1968)による)
『大乘大集地藏十輪經第五巻古點(元慶七(883)年點)』(中田(1965)による)
『法華経玄賛淳祐古點(950年頃)』(中田(1958)による)
『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點(延久三(1071)年～嘉應二(1170)年)』(築島(1965)による)
なお、表2中の「?」は「彼」の「カシコ」と訓まれた確かな用例こそ見いだされないものの、文脈的には「カシコ」と推定されることを意味し、「×」は確かな用例が認められず、推定も困難なことを意味する。

[18]平安時代初期に属する「アレ」の用例は、中田(1965)、中田(1966)によって次の2例が知られる。
彼(アレ)は勝供養を消するに堪へず(不)。(巻第五ノ二四八行)／原文：彼 不堪消勝供養。
令彼(アレ)に一切の縁覺乘を修するヒトヲ、漸次に圓満して、皆悉く幢相縁の定を證得し、獨覺乘に於て不退轉セむことを得しめたまひシカバ、歡喜し禮佛してまた(還)本座に復しき。(巻第七ノ一四五～一四七行)／原文：令彼一切修縁覺乘漸次圓満皆悉證得幢相縁定於獨覺乘得不退轉歡喜禮佛還復本座。
因みに、原文の「彼」はともに三人称代名詞である。平安時代初期の和語文献において「アレ」が観察されないことを考えれば、これらの「アレ」の用例は、資料の加点時期がはっきりしているだけに、「アレ」の発生時期を示唆するところが大きい。

3. 中古から中世後期までの文献における「カレ・アレ」

3.1. 中古和語における「カレ・アレ」

上代語では「カ系指示詞」の用例は極僅かであったのに対し、平安時代初期以降の訓点資料では、「彼」の訓に用いられる「カ系指示詞」が既に増加傾向を示していたことは既述のとおりである。そして、平安時代の物語における「カ系指示詞」の用例も、初期から中期にかけて徐々に増加する傾向にあった。因みに、『源氏物語』が現れるまでは、特に「カ系指示詞」の用例が多く観察されるのは『宇津保物語』であり、しかも、次の例のように、「カレ」の指示対象が上代語同様二人称と三人称に渉っていることが、先に見た上代語「カレ」の用法を裏付ける意味で特に注目に値する。

> 俊蔭林のもとに立てり。三人の人、問ひていはく「彼(かれ)は、なむぞの人ぞ」。俊蔭答ふ「日本国王の使、清原の俊蔭なり」。『宇津保物語・俊蔭』

ただ、『宇津保物語』にはまだ「ア系指示詞」は用いられていない。そこで、次の表3によって平安時代の和語文献における「カレ」と「アレ」の用法の分布を見てみると、「カレ」は上代語文献よりもその用例が多数観察され、しかも物語の地の文よりも会話文に多く用いられている。これによって「カレ」が上代語に比べて一段と発達したことは裏付けられる。

【表3 中古和語における「カレ」と「アレ」の分布】[19]

文　献　名	定型表現	単独用法 かれ	地の文 かれ	会話 かれ	単独用法 あれ	地の文 あれ	会話 あれ
竹取物語	×	1	1	×	×	×	×
伊勢物語	1	1	×	1	×	×	×
大和物語	15	4	1	3	×	×	×
宇津保物語	3	45	2	43	×	×	×
源氏物語	44	43	20	23	6	2	4
枕草子	6	19	5	14	8	1	7

そして、「カレ」と「アレ」は『源氏物語』と『枕草子』において共存するが、両者の用例に顕著な差があり、指示詞に「アレ」という新しい語形を受け入れたものの、「カレ」は指示体系の中で依然中心的で生産的な役割を果たしていることが窺われる。一

[19] 『竹取物語』、『伊勢物語』、『宇津保物語』のデータは索引類を参照したが、『大和物語』、『源氏物語』、『枕草子』のデータは筆者の調査に係る。

方、中古語の「カレ」の用法に目を転じると、次の諸例が示すように、「カレ」の指示対象に二人称的なものと三人称的なものが共存していたことも上代語と軌を一にする。

惟光入りて、めぐるめぐる人の音する方やと見るに、いささかの人げもせず。さればこそ、往き来の道に見入るれど、人住みげもなきものを、と思ひて、帰り参るほどに、月明かくさし出でたるに見れば、格子二間ばかりあげて、簾動くけしきなり。わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおぼゆれど、寄りて声づくれば、いともの古りたる声にて、まづ咳を先にたてて、「かれは誰ぞ。何人ぞ」と問ふ。名のりして、「侍従の君と聞こえし人に対面たまはらむ」と言ふ。『源氏物語・蓬生』（二人称・人）

この例の「かれ」は状況からして聞き手をさすものと考えられるが、次の例の「かれ」はむしろ三人称的な指示対象を指しているようである。

この初瀬に添ひたりし阿闍梨と、同じやうなる、何ごとのあるにか、つきづきしきほどの下臈法師に灯点させて、人も寄らぬ背後の方に行きたり。森かと見ゆる木の下を、うとましげのわたりや、と見入れたるに、白き物のひろごりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と、立ちとまりて、灯を明くなして見れば、もののゐたる姿なり。「狐の変化したる。憎し。見あらはさむ」とて、一人はいますこし歩みよる。『源氏物語・手習』（三人称・物）

このように、「カレ」の指示対象に二人称的なものと三人称的なものが共存しているということは、平安時代に新たに現れた「アレ」においても観察される。

小君近う臥したるを起こしたまへば、うしろめたう思ひつつ寝ければ、ふとおどろきぬ。戸をやをら押し開くるに、老いたる御達の声にて、「あれは誰そ」と、おどろおどろしく問ふ。わづらはしくて、「まろぞ」と答ふ。『源氏物語・空蟬』（二人称・人）

おとなびたまへれど、なほはなやぎたるところつきてもの笑ひしたまふ大臣の、かかる者どもと対ひゐて、このわづらひそめたまひしありさま、何ともなくうちたゆみつつ重りたまへること、「まことにこの物の怪あらはるべう念じたまへ」など、こまやかに語らひたまふもいとあはれなり。「あれ聞きたまへ。何の罪とも思しよらぬに、占ひよりけん女の霊こそ。……」『源氏物語・柏木』（三人称・物）

そして、『源氏物語』に限らず、『枕草子』においても同じ現象が認められる。

かたはらなる人をおしおこして、「かれ見給へ。かかるみえぬもののあめるは」といへば、かしらもたげて見やりて、いみじうわらふ。「あれはたそ、顕證に」といへば、「あらず。家のあるじと、さだめ申すべきことの侍るなり」といへば、「門のことをこそ聞えつれ、障子あけ給へとやは聞えつる」といへば、『枕草子・八』（能因本・六、同じ。三人称・物）

二日ばかりありて、縁のもとに、あやしき者の聲にて、「なほかの御佛供のおろし侍りな

ん」といへば、「いかでか、まだきには」といふなるを、何のいふにかあらんとて、立ち出でて見るに、なま老いたる女法師の、いみじうすすけたる衣を着て、さるさまにていふなりけり。「かれは、何ごといふぞ」といへば、聲ひきつくろひて、「佛の御弟子にさぶらへば、御佛供のおろしたべんと申すを、この御坊たちの惜しみ給ふ」といふ。『枕草子・八七』(能因本・九一では「あれ」に作る。二人称・人)

以上の二例の「かれ」はそれぞれ三人称・物と二人称・人をさすものであり、そして『枕草子・八』の「あれ」の例は三人称・人をさすものであり、次の例の「あれ」は二人称・人をさすものである。

二日ばかりありて、赤衣着たる男、疊を持て來て、「これ」といふ。「あれは誰そ。あらはなり」など、ものはしたなくいへば、さし置きて往ぬ。『枕草子・二七七』(二人称・人)

このように、「カレ」に限らず、「アレ」の指示対象においても二人称的なものと三人称的なものが共存し、しかも、複数の文献にわたって同じ現象が観察されることは、中古語の指示体系は依然上代語同様「一人称対非一人称」の対立をなしていたことを示している。これが「カレ」、「アレ」の人称代名詞への転用を保障するものであると同時に、未だ三人称代名詞を持たない時代の人称体系をも規定するものでなければならない。ここで我々は三人称代名詞が成立する前段階として「一人称対非一人称」の人称体系を認める必要に迫られる。これによってはじめて指示詞から人称代名詞への転用をより自然に説明することが可能になるからである[20]。

3.2. 中世前期から中世後期までの「カレ・アレ」の消長

前節で既に見たように、中古語においては、「カレ」と「アレ」は同じく和文脈に用いられ、「アレ」がやや劣勢ながら一応指示体系の中心に共存していたが、中世前期以降、「アレ」が少しずつ「カレ」の領域を侵しはじめ、「カレ」は指示体系から徐々に後退し、遂に中世後期において「アレ」に取って代わられてしまった。本節は中世前期以降の和語文献を中心にその交替時期を明らかにすると同時に、「カレ」と「アレ」の二人称・人を指す例の下限を確認することによって、上代語以降続いている「一人称対非一人称」の指示体系と人称体系がいつ、その終焉を迎えるかを確認したい。

[20]因みに、近世語において人称代名詞へ転用された「あなた」の指示対象にも幕末の文献まで二人称的なものと三人称的なものが共存していたことについても、同じくただ単に「遠称」からの転用とするのでもなければ、先に成立した三人称代名詞から二人称代名詞への転用、またはその逆とするのでもなく、まさに二人称と三人称が未分化のまま融合していた「一人称対非一人称」の指示体系と人称体系のもたらすところであり、そうした指示体系と人称体系との存在を前提としてはじめてあり得る現象でなければならない。いわゆる「遠称」もかかる意味においてのみ許されよう。

【表 4 平安時代以降における「カ系指示詞」と「ア系指示詞」の消長】[21]

文　献　名	カノ	アノ	カシコ	アソコ	アチ	**カレ**	**アレ**	カナタ	アナタ
竹取物語	26	2	2	0	0	1	0	0	0
伊勢物語	22	0	1	0	0	2	0	0	1
大和物語	38	0	4	0	0	19	0	0	1
宇津保物語	530	7	83	0	0	55	8	17	48
源氏物語	712	4	126	2	0	87	6	37	76
枕草子	18	2	3	0	0	24	8	5	13
狭衣物語	106	3	15	0	0	8	4	1	6
濱松中納言物語	68	1	13	0	0	9	0	1	2
延慶本平家物語	515	34	29	3	2	**84**	**65**	0	10
龍大本平家物語	147	31	9	19	0	**27**	**54**	0	5
虎明本狂言集	73	214	18	26	50	11	318	3	55
好色一代男	36	7	3	2	1	8	15	0	1
雑兵物語	1	4	0	0	0	0	5	0	0
浮世床	8	59	0	8	6	1	32	0	3

表 4 が示すように、指示体系における「カ系指示詞」と「ア系指示詞」との交替と時期を同じくして、「カレ」と「アレ」の交替もおよそ中世前期から中世後期にかけての時期に行われ、文献的には『延慶本平家物語』と『龍大本平家物語』の間がその時期に当たると考えられる。特に『龍大本平家物語』において「カレ」と「アレ」の延べ語数が逆転してからは、和語文献においては「カレ」は和語の指示体系からますます後退する一途をたどったことが窺われる。

一方、「カレ」と「アレ」の用法に目を転じてみると、中世前期の指示体系においては、「カレ」は中古語同様依然二人称と三人称の両方に関わっていたことは、以下の『今昔物語』の用例に徴して明らかである。

橋ノ上ニ女ノ裾取タルガ立テリケレバ遠助怪シト見テ過ル程ニ女ノ云ク「彼レハ何チ御スル人ゾ」ト、然レバ遠助馬ヨリ下テ「美濃ヘ罷ル人也」ト答フ、女「事付申サムト思フハ聞

[21] 用例の調査に当たり、以下の文献は索引類を参照した。『竹取物語』、『伊勢物語』、『宇津保物語』、『狭衣物語』、『濱松中納言物語』、『延慶本平家物語』、『平家物語』（龍大本）、『大蔵虎明本狂言集』、『浮世床』、『雑兵物語』。その他の文献は筆者の調査に係る。

給ヒテムヤ」ト云ケレバ遠助「申シ侍リナム」ト答フ。(巻二十七・二十一)[22]（二人称・人）

餘ノ夫共、久米ヲ「仙人仙人」と呼ブ。行事官ノ輩有テ、是ヲ聞テ云ク、「汝等、何ニ依テ、彼(カ)レヲ仙人ト呼ブゾ」ト。夫共、答テ云ク、「彼(カ)ノ久米ハ、先年、龍門寺ニ籠テ仙ノ法ヲ行テ、既ニ仙ニ成テ、空ニ昇飛渡ル間、……然レバ、其レニ依テ、仙人トハ呼ブ也」。(巻十一・二十四)（三人称・人）

そして、「カレ」の指示体系からの後退は、例えば『延慶本平家物語』において遂に「カレ」が二人称に関わる用例を見いだし得なくなったことにもその一端が窺われる。事実、『延慶本平家物語』の「かれ」は84例を数えるが、その内、「かれら」19例、「かれこれ」5例、「これ…かれ(「かれ…これ」を含む)」25例、「かれをもって」2例、「かれがもと」1例のほか、単独用法は計32例を数える。その用法の内訳を見てみると、三人称・人を指す例25、三人称・物を指す例3、事柄を指す例2、場所を指す例1、その他意味不明が1例と、二人称・人を指す例は一例もないということになる。次に三人称代名詞の例を示す。

兼遠妻ニ語リケルハ、「此冠者君、少ヨリ手ナラシテ、我モ子ト思、カレモ親ト思テ、昵ジゲナリ。……」『延慶本平家物語第三本の七27オ』（三人称・人）

さらに、「かれら」19例のうち、物を指す次の一例を除けば、残る18例はそろって三人称複数・人を表すもののようである。

「乾肉ラ、酪漿、彼等(かれら)ヲ以テハ飢饉ヲ養フ。」『延慶本平家物語第四の二十41オ』（三人称複数・物）

このように、「カレ」の用法が三人称へと収斂されていく傾向を強めていくのに対して、「アレ」は依然二人称と三人称の両方に関わる、「非一人称」の指示詞に止まっていたようである。実際、『延慶本平家物語』の「アレ」65例のうち、「あれほど」7、「あれはいかに」8、「あれら」1、「あれてい」2、「あれ…これ…」1例あり、単独用法46例のうち、三人称・人を指す例17、三人称・物を指す例9、二人称を指す例12、場所指示6例、事柄指示2例という内訳である。平安時代の和語文献において認められた「アレ」の分布をそのまま受け継いでいる感がある。そして、「アレ」が引き続き非一人称の代名詞への転用を続けていることは、以下の例に徴して明らかである。

尊恵、「アレハ何クヨリノ人ゾ」ト問ケレバ、「閻魔王宮ヨリノ御使也。書状候」トテ、其

[22]『今昔物語』に用いられる「彼」を「かれ」と訓むこと自体、決して自明のことではない。例えば、新潮日本古典集成『今昔物語』(阪倉篤義他校注、新潮社)ではこの例の「彼」に「あれ」の訓を与えている。本稿は山田孝雄他校注『今昔物語』の訓に従った。

タテブミヲ尊恵ニワタス。『延慶本平家物語第三本の十四 44 ウ』（二人称・人）

「富部殿ハイヅクニゾ」ト問ケレバ、「アレ ハアソコニただいま佐井七郎ト戦ツルコソ」ト教ヘケレバ、旗をアゲテ、ヲメイテ馳イ(ツ)テミレバ、敵モ御方モ死伏タリ。『延慶本平家物語第三本の二十六 83 ウ～84 オ』（三人称・人）

そして、この現象は『延慶本平家物語』に止まらず、中世後期の文献においても等しく認められる。表 5 は中世前期から中世後期までの「カレ」・「アレ」と人称との関わりの変遷を示すものである。

【表 5：中世前期から中世後期までの「カレ」・「アレ」の用法の移り変わり】[23]

語　形	かれ		用例		あれ		用例	
作　品　名	二人称	三人称	単独	その他	二人称	三人称	単独	その他
延慶本平家物語	0	25	32	52	12	17	46	19
龍大本平家物語	0	2	6	21	8	18	44	10
天草本平家物語	0	1	1	10	2	8	20	4
天草本伊曾保物語	0	1	1	0	1	6	7	0

この表が示すように、「カレ」の二人称を指す用法が『延慶本平家物語』以降一貫して観察されない[24]のに対し、「アレ」は中世後期の『天草本伊曾保物語』まで一貫して「非一人称」の代名詞に転用され続けているが、やはり三人称への収斂が進んでいるようで、二人称を指す「アレ」の用法の減少が目につく。現に、「アレ」の二人称を指す用例は『天草伊曾保物語』の 1 例を最後に、管見のかぎり文献から姿を消してしまったようである。以下、繁雑を避けるため、各文献から 1 例ずつ挙げる。

御曹司「あれ はなにものぞ」ととはれければ、「此山の猟師で候」と申す。『龍大本平家

[23] この表の「その他」には、それぞれ次のような用例が含まれている。『龍大本平家物語』（「かれ」：「かれこれ」19 例、「かれら」2 例。「あれ」：「あれはいかに」8 例、「あれほど」2 例）、『天草本平家物語』（「かれ」：「かれこれ」2 例、「かれもこれも」1 例、「たれにもかれにも」1 例、「かれがもと」1 例。「あれ」：「あれら」2 例、「あれほど」1 例、「あれほどに」1 例）、そして、「三人称」の欄の用例数は三人称・人を指す例のみとし、三人称・物、事柄、場所を指すものは便宜上除いた。

[24] 二人称を指す「カレ」の用例は『延慶本平家物語』以下の諸文献には見いだされないが、『曾我物語』には次の一例が認められる。

ある夕暮に、花園山を見ていりければ、折節、若君、乳母にいだかれ、前栽にあそびたまふ。祐親、これを見て、「かれ は誰そ」ととひけれども、返事にもおよばず、にげにけり。『曾我物語巻二・若君の御事』（二人称・人）

これは管見の限り、「カレ」が二人称を指す例の下限にあたるものである。とすれば、恐らくこれを最後に、上代以降続いてきた指示詞「カレ」から非一人称の代名詞への転用の歴史が幕を閉じることになると思われる。と同時に、「カレ」がその性格において三人称代名詞へと成長していく条件もこれによって整ってきたことにも注目しなければならない。

物語・老馬』(二人称・人)

妓王涙をおさへて「あれはさて仏御前と存ずるが、夢か、現か」と言うたれば、仏申したは、「このやうなことを申せば、こと新しうござれども、申さずはまた思ひ知らぬ身となりまらせうずれば、はじめよりして申す。」『天草本平家物語・妓王清盛に愛せられたこと』(二人称・人)

「たそ」と尋ぬれば、女房「これは死人に物を食はする者ぞ」と言へば、また中から、「酒がなうては。食物ばかりは、さのみ望みしうもない」と答へたところで、女房このことを聞いて、力を落いて、「まだあれは酒のことを忘れぬか？さてはわが手段も無益になった」と歎いた。『天草本伊曾保物語・女と大酒を飲む夫の事』(496-14～20)(二人称・人)

この最後の例の「あれ」をすなわち二人称を指す用法とするには、或いは異論があるかもしれない。しかし、ここではやはり夫婦一対一の場面を想像すればよく、無理に第三者の介在を想定するに及ばないであろう。仮に「歎いた」を重く見て、妻の独り言と解するとしても、独り言と対話との違いは所詮聞き手を内在化させるか、聞き手が外在するかの違いに過ぎない。とすれば、この「あれ」を二人称・人を指す例ではないとすることの根拠にはならない。これは管見の限り、ちょうど「アレ」の二人称・人を指す例の下限に当たることも、「アレ」が三人称へと収斂されていった時期を示唆するだけに、あながち故なしとしない[25]。そして、同じ『天草本伊曾保物語』には、次の例のような、「カレ」の三人称・人を指す例が認められる。

盗人万民の中で、いかにも高声にののしつたは、「わが母ほどの慳貪第一な者は、世にあるまじい。わがこの分になることは、かれが業(しわざ)ぢや。…」『母と子の事』(476-7～10)(三人称・人)

この時代に至っては、「カレ」は既に指示体系から後退し、指示体系はもはや「コ・ソ・ア」の体系に移っていたことに加え、「カレ」は既に二人称・人を指す用法を失ってしまい、人称的にも三人称に収斂されてしまったことを考えれば、この例の「かれ」はもはやこれまでのように指示詞「カレ」からの転用ではなく、三人称代名詞としなければならない。翻訳語にしてしかも他に類例が少ないのは難点であるが、指示詞「カレ」からの転用ならぬ三人称代名詞「カレ」の例として、まさに近世における三人称代

[25]もちろんこの時期より少し後にも「アレ」の二人称・人を指す例が残っている可能性は十分ある。しかし、仮にこの例を最後に、「アレ」の二人称・人を指す例が文献から姿を消したとしても、「アノ～」の語形において依然二人称・人を指す用例が『東海道中膝栗毛』まで続いたことを考えれば、「ア系指示詞」全体の「二人称」又は二人称的な指示対象からの撤退にはなお暫く時間がかかったものと思われる。「アノ」については、本稿の対象ではないので、ここでは「アレ」は「アノ～」より早く三人称へと収斂されたことを指摘するに止める。

名詞「カレ」の先蹤をなすものとして注目してよい[26]。

しかし、ここで注意を要するのはこのような「三人称」的に用いられる「かれ」はあくまでも翻訳という特殊な文体によって支持されているということである。この「かれ」は未だ一般化を許さない特殊なものであることは、和語文献における「カレ」は常にある特殊なニュアンスにつきまとわれていたことによって裏付けられる[27]。

次に中世後期の話し言葉を多く残しているとされる『史記桃源抄』における「アレ」の用法を見てみよう。

3.3. 『史記桃源抄』における「アレ」

『史記桃源抄』において、まず注目したいのは、例えば次の諸例が示すように、「アレ」の指示対象が依然二人称と三人称の両方に渉っていることである[28]。

> (謁入、呂公大驚、起、迎之門。呂公者、好相人、見高祖狀貌、因重敬之、引入坐。)蕭何曰:「劉季固多大言少成事 [蕭何カ曰ク劉季固ニ大言多クシテ成事少シ]。」／蕭何カ又例ノ圖ナイ迂闊ヲセラレタヨト思テ、呂公ハ令ノ重客テ、マレナルマラウトテ居ラレタニトテ、チツトハ、カナシサニ、アレハ名譽ノ迂闊ナル人テ、マウサルル事ニ、實ハ少サフト云テ、心得サスルソ。(巻五 34 頁)(三人称・人)

原漢文を引くまでもなく、これは蕭何が呂公に向かって、劉季(劉邦)のことを「あれ」と言っている場面であり、三人称・人を指す用法に間違いない。そして、次の例は二人称・人を指す「アレ」である。

---

[26]恰も「カレ」を代名詞として扱う中世後期の辞書類も、キリシタン物を中心に現れてくる。例えば、「カレ」及び三人称代名詞については、J. ロドリゲス『日本大文典』(1604 年刊)では次のように記述されている。

第三人称に用ゐるもの:Anofito,1. mono (あの人、又は、者)。Sonofito,1. Mono(その人、又は、者)丁寧。(中略)Care(彼)。Carega(彼が)、Core(これ)、Corega(これが)。(267 頁)

一方の『日葡辞書』(1603 年刊)では、「kare カレ(彼)代名詞。あの人、または、あのもの」とし、『慶長三年耶蘇會板　落葉集』では、「彼」の右に「ひ」と音を示し、左には「かれ」と訓を宛てている(『落葉集・色葉字集』122 頁)一方で、「他」の右に「た」と音を示し、左には「ひと」の訓をあてたほか、「よそ・かれ」とも訓んでいる(『落葉集・小玉篇』188 頁)のが注目に値する。この「他」は恐らく白話小説によってもたらされた三人称代名詞の「他」であろうが、「ひと」の訓も残していることが興味深い。

他には、これらの辞書よりやや古いものとしては、清原宣賢自筆伊路波分類體辭書『塵芥』は「彼」には「かれ」の訓と「ひ」の音を宛てている(『塵芥』上 56 ウ)のが注目される程度である。

[27]例えば、『大蔵流虎明本狂言集』には「かれ」の単独用法は計 3 例を数え、すべて三人称・人を指す用法である。そのうち、『どもり』に用いられる「かれ」2 例は、夫が事の一部始終を謡い風に口上する段のもの、『ゆうぜん』の 1 例は幽霊となった祐善が出家に向かって語る段のものであり、等しく重々しい雰囲気が似合うような特殊なもののようである。因みに、『どん太郎』に用いられた「かれら」1 例も勿体ぶって物言っているような言葉遣いであり、どことなく古語的な堅苦しさが窺われる。中世後期における「カレ」の古語化は相当進んだようである。

[28]引用に際し、原漢文の文脈を補うために追加した部分を(　)に入れて『史記桃源抄』の引用箇所と区別した他、『史記桃源抄』にある訓読は[　]の中に入れた。なお、引用箇所については、京都大学電子図書館貴重資料図像『史記抄』によって照合し、頁数と表記はこれに従った。

（酒闌、呂公引目固留高祖。高祖竟酒、後。）呂公曰：「臣少好相人、相人多矣、無如季相、願季自愛。／［呂公カ曰ク臣少（ワカカツ［ママ］シトキヨリ）好テ人ヲ相シキ。人ヲ相セルコト多シ。季カ相ニ如クハ無シ。願クハ季自愛セヨ］。」／言ハモトカライカホトノ人ヲカ相シツラウ。イツタウ相シソコナウタ事ハナイカ、アレノ相ノ様ナハ、マタナイソ。カマイテ大事ノ身テヲリサフソ。自愛珍重メサレヨト云ソ。（巻五 35 頁）（二人称・人）[29]

ここにおいても、呂公がその将来を見込んだ高祖劉邦のことを「アレ」と指しているように、二人称・人を指す用法に間違いない。

このように、中世後期、しかも当時の話し言葉を多く残しているとされる、『史記桃源抄』における「アレ」が二人称・人と三人称・人の両方をさしていたことは、指示体系が「コ・ソ・カ」に移ってからも、特に当時の話し言葉において「一人称対非一人称」の人称対立が依然維持されていたことを示している。

以上、「アレ」の非一人称の代名詞に転用した例であるが、『史記桃源抄』には更に次の例のように中世後期の指示体系と人称との関わり方を示唆する興味深い例がある。

傳器而食トハ、一器ノ中ニアル食物ヲ、一口食テハ、アレニ傳ヘ、アレカ一口食テハ、又コチヘ傳テ食ソ。（巻二 51 頁）

この例の「傳器而食」とは、その場にいる数人で食べ物を回して食べることであるが、この例のように、その場に居合わせた人々全員を指すのに「コチ」と「アレ」だけで何ら過不足が感じられない。これは、「アレ」の指示対象はとにかく「コチ」（一人称）以外の誰でもよいわけで、いわゆる二人称でも三人称でもなく、実際対者とも第三者とも限定しえない、要するに二人称と三人称が未分化のまま融合していたところの「非一人称」を指しているからに他ならない。「コチ」が「自分」という一人称的な指示対象を指すのに対して、この「アレ」は「自分（一人称）以外の人々」すなわち「非一人称」を指すものと解すべき端的な一例といえよう。

そして、「コチ」だけではなく、「我」と「アレ」が対にして用いられるような次の例においても、「アレ」は決して二人称とも三人称とも限定しえないものであり、「一人称」と「非一人称」との対立は一層顕著に認められる。

（灌夫亦倚魏其而通列侯宗室爲名高。両人相爲引重。）／引重ハ互ニアレモ我モ引キ重スルソ。（巻十四 10 頁）

[29] この 2 例の「あれ」については、現代語の「アレ」のように指示対象に対する軽侮の意は認められない。これによって考えるに、「アレ」を用いて三人称・人を指すのに軽侮のニュアンスが伴うようになったのは、恐らく三人称単数男性を表す代名詞「カレ」が成立し、人間・物との区別を知ってからのことと思われる。

要するに、「一人称対非一人称」の対立においては、「二人称」と「三人称」との区別よりも、一人称とそれ以外のものとの区別が優先され、聞き手は恐らく対者であるより以前にまず他者であったに違いない。聞き手も所詮は他人であり、他者にほかならない。

これまで見てきたように、中古語から中世後期にかけて、「カレ」と「アレ」の指示対象には、依然二人称的なものと三人称的なものが併存し、指示体系が「一人称対非一人称」の対立をなしていたが、そうした指示体系のもとで「カレ」と「アレ」は、中古語からそれぞれ中世後期の『曾我物語』と『天草本平家物語』にかけて「非一人称の代名詞」に転用されていた。しかし、「カレ」と「アレ」はそれぞれ『曾我物語』と『天草本平家物語』の例を最後に、相継いで二人称を指す用法を失ってしまった。上代語以降続いてきた、指示詞から「非一人称の代名詞」への転用はここにおいてその終焉を迎えたのである。そして、時を同じくして、翻訳語としてではあるが、早くも『天草本伊曾保物語』において「カレ」の三人称代名詞の用法が認められるなど、「アレ」が話し言葉の中で三人称代名詞への転用を続けていたその一方で、「カレ」の三人称代名詞としての歴史が始まろうとしていた。時代はもはや近世である。

4. 近世語における「カレ」と「アレ」

これまで見てきたように、中世前期まで等しく非一人称の代名詞として用いられていた「カレ」と「アレ」であったが、中世後期において相継いで非一人称より三人称への収束を強めていった。そして、近世前期に至ってはその傾向は一層顕著になった。これは例えば擬古的な文体が濃厚な『好色一代男』においても同じであった[30]。

そして、近世も後期になると、例えば江戸語の話し言葉が多く見られるとされる『浮世床』においては、「かれ」はわずか1例を見るのみで、しかも「かれこれ」のような定型表現で用いられ、逆に三人称代名詞に転用した「あれ」は32例を数えるほどに至ったといった具合である。このように、和語文献から少しずつ姿を消していく「カレ」ではあるが、そのまま消滅するわけではなかったようである。それは漢文脈或いはその翻訳、翻案、さらにその影響下にあった読本のような異なる文体においてその命脈を保っ

[30]『好色一代男』では、「かれ」は計8例を数えるが、その内、「かれこれ」5例、「かれら」2例、「かれがもと」1例である。そして、「かれら」2例が三人称代名詞の複数を表すのに対し、「あれ」15例のうち、会話文10例、地の文5例と、人称的にもすべて三人称としてよいものばかりである。

寢る計に身ごしらえせし處へ、誰とはしらずに隱して、連ぶしに歌説經あはれに聞えて、今までは手枕さだかならず目覺て、出立燒く女に「あれ はいかなる人のうたひけるぞや」「されば、此宿にわかさ・若松とて兄弟の女ありける。其貌昼みせましたい」。『好色一代男・旅のでき心』（三人称・物）

こゝろながら笑しく、「あれ はいかなる女」と尋ねける。「人の召つかひ、竈近きもの」と申。『好色一代男・是非もらひ着物』（三人称・人）

ていたようである。次に、読本と通俗物における「カレ」の用法を見ることにする。

4.1. 読本と通俗物における「カレ」

読本は中国の白話小説[31]を翻案したものであり、程度の差こそあれ、読本の作品はすべて白話小説の影響下にあったと見てよい。ここで注目すべきは、白話小説ではもっぱら三人称代名詞「他」が用いられているが、実際、読本の作品においては、「他(かれ)」だけではなく、「彼(かれ)」と「渠(かれ)」も用いていることである。我々はここに、上代語以降の和文脈には、時には広く時には狭く用いられてきた和語「カレ」との連続とともに、訓点資料や漢文訓読において三人称代名詞「彼」の訓に宛てられてきた翻訳語「カレ」との連続をみることができる。そして、漢文訓読に用いられた「カレ」はもっぱら理解を助けるための翻訳語であるのと違い、漢文・白話小説の影響が強いとは言え、読本は単なる翻訳ではなく、言語表現として生み出された一種の文学である。その意味で日本語の文体史における読本の存在には訓点語とは範疇を別するものがある。

今その一例を『雨月物語』によって示すと、例えば、『雨月物語』では「かれ」は全部で28例を数えるが、内「かれこれ」1例(仏法僧：六十六の三)を除けば、単独用法は27例(地の文6例、会話文21例)あり、すべて次のような三人称代名詞の用法である。

> 我跪まりし背の方より。大なる法師の。面うちひらめきて。目鼻あざやかなる人の。僧衣かいつくろひて座の末にまゐれり。貴人古語かれこれ問弁へ給ふに。詳に荅へたてまつるを。いといと感させ玉ふて。他(かれ)に録とらせよとの給ふ。『雨月物語・仏法僧』(六十六の四)

> 立せ玉へといへば。一座の人々忽面に血を灌ぎし如く。いざ石田増田が徒に今夜も泡吹せんと勇みて立躁ぐ。秀次木村に向はせ給ひ。よしなき奴に我姿を見せつるぞ。他(かれ)二人も修羅につれ来れと課せある。『雨月物語・仏法僧』(七十一の五)

> 豊雄。かく捕はれていつまで偽るべき。あはれかの女召て問せ玉へ。助。武士らに向ひて。縣の真女子が家はいづくなるぞ。渠(かれ)を押て捕へ来れといふ。『雨月物語・蛇性の淫』(一〇二の九)

筆者の検するところによれば、『英草紙』(寛延2年)には「かれ」が52例を数えるが、そのうち、地の文には19例、会話文には22例、他に心中語として10例用いられている。一方、『西山物語』には僅か2例用いられているのみで、『春雨物語』にはついに1例も観察されないといった具合である。このように、作者によって、しかも同じ作者でも前期と後期によって「かれ」の使用頻度に差があることは、話し言葉に基盤を持たない、一種の翻訳語としての「カレ」の不安定なステータスを示していると言えよう。

[31]明・清時代に流行した、中国語の俗語・話し言葉を用いた通俗小説。「白話」とは俗語、話し言葉の意。

因みに、表記については、『英草紙』では「彼」(49例)が最も多く、「他」は僅か3例に止まった。そして、『雨月物語』では「蛇性の淫」で「畜」を例外的に「かれ」と訓ませているのを除けば、「他」と「渠」が普通で、「彼」は「此」と対に用いられるに限られているようである。この傾向は例えば、『近世白話小説翻訳集』に収録された一連の通俗物においても認められる。次の表6を参照されたい。

【表6 『近世白話小説翻訳集』における「他(彼)」】

作　品　名	彼(かれ)	他(かれ)
通俗醉菩提全傳(宝歴九年五月刊・京都)	×	○
通俗隋煬帝外史(宝歴十年春刊・京都)	×	○
通俗赤縄奇縁(宝歴十一年刊・京都)	×	○
通俗金翹傳(宝歴十三年刊・大坂)	×	○
通俗孝肅傳(明和七年八月刊・京都)	×	○
通俗大明女仙傳(寛政元年十二月刊・京都)	×	○
通俗醒世恒言(寛政元年初秋刊・江戸)	×	○
通俗繡像新裁綺史(寛政十一年九月写・筆者写未詳)	×	○
通俗平妖傳(享和二年春刊・京都)	×	○
通俗西湖佳話(文化二年初春刊・大坂)	○	×
通俗古今奇観(文化十一年仲秋刊・尾陽)	×	○
通俗忠義水滸傳(寛政二年初冬刊・京都大坂)	○	×
通俗西遊記(第一編～第四編：文政六年刊・大坂、第五編：天保二年・江戸、尾陽、京都、堺、浪速)	×	○

表6が示すように、通俗物では「他(かれ)」が多く用いられ、「彼(かれ)」はごく少数に過ぎない。近世語の「カレ」と近代中国語の三人称代名詞「他」との強い関わりを窺わせる。通俗物においても一種の翻訳語としてではあるが、「カレ」は読本同様三人称代名詞として用いられているのである。因みに、管見の限り通俗物には「アレ」は用いられていないようであるが、例えば、『忠義水滸傳解』(陶山冕著、宝暦七(1757)年刊)では「他」を「カレナリ、アレナリ、又アノト訳スルナリ」(九ウ)と解しているように、「アレ」もまた「他」の訳語に宛てられていたのである。そして我々は近世期の漢文笑話翻訳本にその例を見ることができる。

4.2. 近世漢文笑話翻訳本における「他」と「他」

通俗物同様、近世漢文笑話の翻訳本も所詮漢文又は白話の翻訳である以上、「他」の訳語に「かれ」が用いられるのはいわば当然ともいうべきことである。果たして、明和五年十月の序を持つ『笑府初編・願脚踢』では「他」を「かれ」と訓ませている。

> 樵夫、柴ヲ擔キ、誤テ医者ニツキアタリケル。医腹ヲタテ拳ヲ揮テクラワサントス。樵跪テ曰ク、「寧足ニテ踢テ下サルベシ」ト云。旁ノ人フシギヲタテケレバ、樵云、「他ガ手ニカカルナラハ、定テ活ルコトナリマスマヒ」。『笑府初編・願脚踢』

そして、『笑林廣記鈔・願脚踢』(安永七年刻)でも「彼」を「かれ」と訓ませており、両者の文体もほぼ同じ漢文訓読体であることに留意しよう。

> 樵夫柴ヲ荷ナヒ行シカ、アヤマツテ醫者ニアタル。醫怒テ拳ヲアゲ、ウタントス。樵夫ノ曰、足ニテ踢タマフトモ、必ス手ヲ動シタマフナト謂フニ、傍ノ人訝リテ其ユヘヲ問ハ、樵夫ノ曰ク、「彼ガ脚ニテ踢ラルルトモ、死スルニハ到ラシ。彼カ手ニカカレハ、必ス生カタシ」。『笑林廣記鈔・願脚踢』

一方、『解顔新話・願脚踢』(寛政六年十月序)では、同じ「他」は「かれ」ではなく、次のように「あれ」と訓まれている。

> 樵夫柴を担とて誤して医士に觸る。医怒て揮拳とする。樵夫の曰、「寧ハ脚で踢でもらひませふ。尊手を動さるるには及びませぬ」と。傍の人訝がる。樵者の曰、「踢てハまだ死ハせねど、他が手に経てハ、定然活られぬ」。『解顔新話・願脚踢』

一読して分かるように、『解顔新話・願脚踢』は『笑府初編・願脚踢』や『笑林廣記鈔・願脚踢』と違い、漢文訓読の文体からほど遠く、むしろ和文に近いものである。これによって考えるに、「かれ」と「あれ」の違いは、恐らく文体がより漢文書き下し文に近いものと、より和文しかもより話し言葉に近いものとの違いに対応するものと考えられよう。そして、次の例も恐らく話し言葉に近いものと考えられる。

> 老者孫を領て市へ出る。一妓者の門首をぶらぶらとありくから、妓が、「モシ茶を吃れ」と。老者きかぬふりして進去る。孫公々に問ていはく、「アノ娘子は誰じや」と。公のいはく、「アレハ是娼婦」孫の曰、「デモ你を請で茶を吃というふに、ナゼ去ぬ」と。公のいはく、「他は我を請で茶を吃せるでハない。我と他と雲雨させて我が東西を騙さふとするのだ」と。孫牢く記へて忘れず。家へかへると、母親が茶を汲んで公々に吃せるを見ると、手を拍て、「我は暁得よ。母親が公々と雲雨させて公々の東西を騙さふ」と。『解顔新話・姦媳』

このように、近世後期の江戸語における「カレ」と「アレ」についてはっきりとその文体差が指摘できるが、これによって推測するに、「カレ」はあくまで漢文や白話小説の『彼』と『渠・他』を背景にしてはじめて成立可能な、一種の翻訳語であるのに対し、「アレ」は恐らく話し言葉において三人称代名詞として用いられていたもののようである。次に、近世庶民の話し言葉に近い言語を残していると思われる噺本を中心に、近世後期の江戸語における「カレ」と「アレ」の用法を見ることにしたい。

4.3. 近世噺本における「カレ・カノ・アレ」の用法

読本は中国の白話小説の影響下にあり、近世漢文笑話の翻訳本も文体の差はあるものの、概して漢文や白話の影響を免れるものではない。これとは異なり、その庶民性と即興性のために、噺本は概して上方語(軽口本に限って言えば)、江戸語の口語を多く残していると思われる。以下、近世噺本65種による統計の結果を表7に示す。

【表7 近世噺本65種における「カレ・カノ・アレ」】[32]

作　品　名	かれ	かの	あれ(人)	あれ(その他)
鹿の巻筆(日本古典文学大系本)	×	30	×	×
武藤禎夫校注『軽口本集』(岩波文庫)	3	117	8	21
興津要校注『江戸小咄』(講談社文庫)	3	70	24	95
興津要校注『江戸小咄(続)』(講談社文庫)	×	48	9	73
宮尾しげを校注『江戸小咄(上)』(平凡社)	×	48	2	43
宮尾しげを校注『江戸小咄(下)』(平凡社)	×	35	15	41
武藤禎夫校注『小咄本集』(岩波文庫)	×	20	2	4
武藤禎夫校注『落語本集』(岩波文庫)	1	22	2	16
合　　計	7	390	62	293

表7が示すように、「カレ」がほとんど漢文訓読的な文体に局限されるのに対して、三人称代名詞に転用した「アレ」は上方語と江戸語の両方において広く用いられていたようである[33]。用例は多く挙げるまでもなく、『茶のこもち』(安永三年春序、江戸堀野

[32]データはすべて筆者が調査したものである。まず、『鹿の巻筆』に「カレ」と「アレ」が用いられないのは擬古文的な文体によると思われる。そして、武藤禎夫校注『小咄本集』は他の諸本と重複したものを除いたため、『新口花笑顔』(安永四年刊)だけになる。それから、武藤禎夫校注『軽口本集』の「かれ」3例は、『かの子ばなし』序文に現れる「彼」の単独用法1例、「かれこれ」2例、興津　要校注『江戸小咄』の「かれ」3例は「誰彼(だれかれ)」1例、「かれこれ」2例の内訳である。なお、「アレ」の単独用法中の人を指す用法を中心に調査したため、同じ単独用法でも、物、事柄、場所を指すものや感動詞的に用いられるものなどは便宜上「その他」に含めておいた。

[33]しかし、ここで同時に注目しなければならないのは、「カレ」の全体的な退潮とは逆に、「カノ」は間断な

屋仁兵衛板)の一例を示すに止める。

馬道を二人づれにて、いきな身をして行く。むかふから親父が寺参りのかへりがけ、はたと行きあい、「をのれはどこへ行く」「アイこの人にさそはれ、燈籠見物に行きます」「エエ留守をあけてにくいやつ。早くかへれ」「アイ」とわかれて行く。つれ「あれは親父か」「イイヤ」「それでも大分横平だ」「ナニあれは下しやくばらの」。『茶のこもち・燈籠』

次に参考までに『東海道中膝栗毛(第一編～第四編)』の「かれ」、「かの」と「あれ」の用法を見てみよう。

【表8『東海道中膝栗毛(第一編～第四編)』における「カレ・カノ・アレ」】[34]

か　れ	かの	かれこれ	たれかれ	あれ(人)	あれ(その他)
1(渠等・かれら)	32	5	1	11	25

ここでも三人称代名詞として「アレ」が用いられるのに加え、「カレ」の偏りや「アレ」の用法的な分布も先に示した嘶本と同じ傾向を示している。両者ともよく当時の話し言葉の実態を反映していると見てよい。そして、この傾向は更に明治初期、明治中期まで続いたことは『怪談牡丹燈籠』と落語『成田小僧』のデータの示すところでもある。

4.4.『怪談牡丹燈籠』の「カレ」と『真景色累ケ淵』の「アレ」

まず、『怪談牡丹燈籠』の「かれ」7例のうち、次の①～③のような飯島の認めた書状を人に語って聞かせる口調のもののほか、④、⑤は家名再興を託された武士生まれの若い男性の台詞であり、残る2例は飯島の心の動きを叙するのに使われており、すべて武士かそれに近い人物の用語であり、普通の使い方とは言いがたいようである。

相川新五兵衛は眼鏡をかけ、飯島の書置きをば取る手おそしと読み下しまするに、孝助とはいったん主従の契りを結びしなれども敵同士であったること、孝助の忠実に愛で、孝心の深きに感じ、主殺しの罪に落とさずして①かれが本懐をとげさせんがため、わざと宮野辺源次郎と見違えさせ討たれしこと、孝助を急ぎ門外にいだしやり、自身に源次郎の寝間に忍び入り、②かれが刀の鬼となる覚悟、さすれば飯島の家は滅亡いたすこと、③かれら両人われを討って立ち退く先は必定お国の親元なる越後の村上ならん、(中略)相「これ孝助殿、血相変えてどこへ行きなさる」と言われて孝助は泣き声を震わせ、孝「ただいまお書置

く、しかもかなりの頻度で嘶本に用いられつづけたことである。「カノ」は「カレ」に比して指示体系からの後退が遅れていたと見るよりは、幕末から明治中期にかけて、「彼(かの)女」、「彼(かの)男」を経て「彼女(かのじょ)」などの語形が工夫される際、一貫して「カノ」が選ばれた理由は恐らくこの辺にあるのであろう。

[34]第一編～第四編は享和二年～文化二年、「膝栗毛發端」は文化十一年の出版に係る。なお、データは、麻生磯次校注『東海道中膝栗毛(上)』(岩波文庫)を用いて、筆者が調査したものである。

きの御様子にては、主人はわたくしを急いで出し、あとで客間へ踏み込んで源次郎と闘うとのことですが、いかに源次郎が剣術を知らないでも、殿様があんな深手にてお立ち合いなされては、④かれが無残の刃の下にはかなくおなりなされるは知れたこと、みすみす敵を目の前に置きながら、恩あり義理ある御主人を⑤かれらにむごく討たせますは実に残念でござりますから、すぐにとって返し、お助太刀をいたす所存でございます。」『怪談牡丹燈籠・十五』

そして、『真景累ケ淵』の「かれ」2例の内、次の一例は事柄指示の「かれ」で、しかも漢文書き下し文的なものなので、言文一致体小説における「かれ」のような三人称代名詞とすることが出来ない。

富「ああ、進退ここにきわまったなあ。どうも世の中になにが切ないといって腹のへるくらい切ないことはないが、どうも鳥目がなくって食えないと、なおさらへるねえ。天草の戦でも、兵糧攻めではかなわぬから、高松の水攻めといえども、かれも兵糧攻め、天草でも駒木根八兵衛、鷲塚忠右衛門、天草玄札などという勇士がいても兵糧攻めにはかなわぬ。ああ大きな声をすると腹へ響ける。……」『真景累ケ淵・五十九』

残る1例は次に示すように、落ちぶれた武士で今は剣術の師匠をしている安田のせりふの中に現れている。

貞「へえ先生」安「来たのはだれだ」貞「麹屋のお隅が、先生にお目にかかってお話し申したいことがあって、雪の降る中をわざわざまいったと言います」安「隅が来たか。はて、うっかり開けるな。ええ、かれはこの一角をかねて敵とつけねらうことは風説にも聞いていたが、まったくさようと見える。うっかり開けて、相撲取りなどを連れてずかずかはいられては困るから、よく気をつけろ。ええまったく一人か、一人なら入れたっていいが」『真景累ケ淵・七十四』

このように、以上の数例は等しく武士又はそれに近い人物の用語に係る。これによって推すに、恐らく圓朝は意図的にこの「かれ」を用いてその「武士らしさ」を演出しているのであろう。これはもちろん必ずしも話し言葉に裏打ちされない一種の創作である。そして、同じく明治中頃の口演速記落語『成田小僧』[35]では「あれ」全9例の内、7例までが三人称代名詞に転用した「あれ」であり、残る2例は感動詞1例と物を指す1例のみである。三人称代名詞に転用した「あれ」は例えば次のようなものである。

婆「夫が此節些ともお入来がない処からの病なのです。実は小千代が清さんに馬鹿惚れ

[35]三代目三遊亭円遊口演、酒井昇造速記、『百花園』一巻一号(明治22・5・10)、三巻三十八号(明治23・11・20)に掲載。暉峻康隆他編『口演速記明治大正落語集成(第一巻)』(講談社、1980年)による。

をして居るんですネ。若旦那の事ばかり思つてるんで。実は他所に少し好お客さまが有つて、先方へ娵に行かれるロですから、何様かして其処へ遣らうと思つても、何だか吾儕は其方へ纏め度と思つて居ますヨ。本郷の子息さんはお宅に居ないやうな事を云ふので、苦慮々々して本当に無情と云つて、ブラブラ病に成つちまひましたが、和郎さんは一番彼(あれ)の気に入つて居ますノ。夫れで和郎さんお頼みに来たノ」花「是は恐入ります。私が姐さんのお気に入る事は有りませんが、ヂヤア私は直に参りませう。」「成田小僧」

このように、「アレ」は、少なくとも明治の中頃まで話し言葉で三人称代名詞に転用されつづけていたようである。「成田小僧」が口演された明治22年といえば、折しも、嵯峨の屋御室が『野末の菊』において、彼(かれ)・彼女(かのじょ)、彼等(かれら)を最初に言文一致体に導入した年でもある。三人称代名詞に転用された「アレ」も結局は「カレ」と「カノジョ」に取って代わられる運命にあったことはいうまでもない。しかし、ここで指摘しておきたいのは、言文一致体において三人称単数・男性を表す「カレ」と近世語の「カレ」とは同じ三人称代名詞として連続していることである。その意味で、言文一致体の「カレ」や「カノジョ」とても最初は読本の「カレ」同様、話し言葉に基盤を持たない、創作上の言葉であったことも決して故なしとしない。言文一致体の「カレ」と「カノジョ」はまさに近世語の「カレ」によって作られた三人称代名詞という基盤をそのまま継承しながら、男女の別に対応したものに他ならない。

5. まとめ

上代以降における指示詞「カレ」と代名詞「カレ」についての従来の研究には、とかく日本語内部の問題として処理する傾向があり、近代以降における三人称代名詞の成立については、とかく西洋語を翻訳する必要が強調されがちであった。これに対し、本稿は、時代を上代から近世後期までの間に限り、中国語の指示体系並びに三人称指示詞「彼(他)」と日本語の指示体系並びに三人称代名詞との関わりを見てきた。結論はおよそ次の四点にまとめられる。

一、上代、中古並びに中世日本語の指示体系と上代(先秦時代)中国語の指示体系との区別原理(例えば、「知覚対象・観念対象」、「知覚対象」の「近・遠」、人称との関わり方では「一人称対非一人称」)の間には、一種の平行性が見られる。そして、両者が同じく「遠称指示詞」を「非一人称の代名詞」に転用させ、それによって三人称代名詞を獲得していったものと思われる。

上代語と中古、中世語の和語文献における「カレ・アレ」の指示対象にいわゆる二人

称的なものと三人称的なものが共存していたのは、二人称と三人称とはまだ未分化のまま融合していたためであり、この時代の指示体系はまだ「一人称対非一人称」の対立をなしていたためと考えられる。この人称の対立は人称代名詞へ転用した「カレ・アレ」においても同じであった。いわゆる「遠称」とは実は「非一人称」であったのである。このように、日本語の三人称代名詞獲得の過程において、三人称代名詞の前段階としての「非一人称の代名詞」を想定することによって、指示詞から人称代名詞への転用と、三人称代名詞の成立についてより自然な説明を与えることができる。

二、平安時代の訓點資料においては、「カレ」は「彼」の訓として用いられたが、物語などの和語文献においては会話文にも用いられ、性格的にはむしろ当時の和語であったと思われる。平安初期に初めて現れた「アレ」も訓点資料、物語の別なく、「非一人称の代名詞」に転用された。指示体系における「カレ」と「アレ」の交替は『宇津保物語』や『源氏物語』に始まり、恐らく中世後期の『龍大本平家物語』の成立する時代までに完了したと思われる。因みに「カレ」の二人称に関わる例は『曾我物語』(流布本系統)の例を、「アレ」の二人称に関わる例は『天草本伊曾保物語』の例を最後に、文献的に見られなくなり、日本語の人称代名詞における「非一人称の代名詞」の過渡的な段階が終焉を迎えた。

三、一方、「カレ」を三人称代名詞に用いる例は早くも中世後期の翻訳物『天草本伊曾保物語』に現れるが、近世にはいってからは、「カレ」は読本、白話小説の翻訳本や漢文笑話集などの文献に、近代中国語の三人称代名詞「他」の訳語として文体的に局限されながらも会話文を中心に多く用いられるようになった。「彼女」を別にすれば、「カレ」と「カレラ」はすでに近世の読本、通俗物、白話笑話の翻訳物などに現れていたものであり、「カレ」が「彼(他)」と同じく男・女、人間と物の区別を知らないことと、文体的には局限されることを除けば、すでに三人称代名詞としての資格を獲得していたと見ることができる。

四、明治時代の言文一致運動のなかで「カレ」が三人称単数・男性の代名詞として用いられ、「カノジョ」が新たに生み出されるように、近代におけるヨーロッパの言語の影響によって日本語の三人称代名詞に男女の区別がもたらされたことは事実であるが、我々は、上代語以降長い間「非一人称の代名詞」に転用され、とりわけ近世においては白話小説・漢文笑話の翻案物や翻訳だけでなく、読本のような近世小説にも三人称代名詞として盛んに用いられていた「カレ」を抜きにして、言文一致の小説における三人称単数・男性を表す代名詞「カレ」を語ることはできない。

参考文献

王　力(1980)『漢語史稿』(新1版)中華書局

大坪併治(1992)『石山寺本大方廣佛華厳經古點の國語學的研究』風間書房

奥村恒哉(1954)「代名詞『彼、彼女、彼等』の考察－その成立と文語口語－」『国語国文』第二十三巻十一号、pp.63-78.

郭　錫良(1980)「漢語第三人称代詞的起源和發展」『語言學論叢』(北京大学中文系『語言學論叢』編輯委員会)第六輯、pp.64-93.

春日政治(1942)『西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究』(1985年勉誠社復刊本を参照)

黄　盛璋「先秦古漢語指示詞研究」『語言研究』1983年第2期、pp.136-157.

清水　功(1959)「いわゆる遠称の指示語の一特殊用法について」『名古屋大学国語国文学』第2号、pp.51-62.

周　法高(1959)『中国古代語法：稱代編』中央研究院歴史語言研究所專刊之三十九(臺北)

築島　裕(1965)『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究譯文篇』東京大学出版会

唐　作藩(1980)「第三人称代詞『他』的起源時代」『語言學論叢』(北京大学中文系『語言學論叢』編輯委員会)第六輯、pp.55-63.

中田祝夫(1965)「正倉院聖語藏本大乘大集地藏十輪經(巻五)元慶七年訓點譯文」『國文學漢文學論叢』(東京教育大學文學部紀要)第十輯、pp.1-32.

中田祝夫(1966)「正倉院聖語藏本大乘大集地藏十輪經(巻七)元慶七年訓點譯文」『國文學漢文學論叢』(東京教育大學文學部紀要)第十一輯、pp.1-31.

中田祝夫(1968)「地藏十輪經元慶七年訓點(巻一、二、四、八～十)」『古點本の國語學的研究・譯文篇』講談社、pp.1-146.

中田祝夫(1949)『古點本の國語學的研究　總論篇』講談社

中田祝夫(1958)『古點本の國語學的研究　譯文篇』講談社

橋本四郎(1965)「古代語の指示体系－上代を中心に－」『国語国文』第三十五巻第六号、pp.329-341.

廣田榮太郎(1953)「『彼女』という語の誕生と成長－近代譯語考2－」『國語と國文學』昭和二十八年二月號、pp.48-56.

堀口和吉(1982)「代名詞『カレ』をめぐって」『山邊道』(天理大學國語國文學會)第二

十六號、pp.62-86.
森岡健二(1999)『欧文訓読の研究－欧文脈の形成－』明治書院
楊　樹達(1920)『高等国文法』商務印書館
李　長波(1994)「指示詞の機能と「コ・ソ・ア」の選択関係について」『国語国文』第六十三巻第五号、pp.37-54.
李　長波(1998)「日本語指示体系の史的変化について」『国語国文』第六十七巻第十二号、pp.18-38.
李　長波(1999a)「日本語定称指示詞の歴史的研究」平成11年度京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文
李　長波(1999b)「古代中国語の指示詞とその文法化について」*Dynamis.* Vol.3, pp.45-72.
Jakobson, R. (1942) The Paleosiberian Languages. *American Anthropologist.* Vol.44 No.4, Part.1, pp.602–620.

本文

『易經（上）』今井宇三郎校注、新釈漢文大系 23、明治書院、1987 年
『易經（中）』今井宇三郎校注、新釈漢文大系 24、明治書院、1993 年
『春秋左氏伝（一）』鎌田　正校注、新釈漢文大系 30、明治書院、1971 年
『春秋左氏伝（二）』鎌田　正校注、新釈漢文大系 31、明治書院、1974 年
『春秋左氏伝（三）』鎌田　正校注、新釈漢文大系 32、明治書院、1977 年
『春秋左氏伝（四）』鎌田　正校注、新釈漢文大系 33、明治書院、1981 年
『論語』吉田賢抗校注、新釈漢文大系 1、明治書院、1960 年
『孟子』内野熊一郎校注、新釈漢文大系 4、明治書院、1962 年
『萬葉集』（訳文篇）佐竹昭広・木下正俊・小島憲之編、塙書房、1972 年
『補訂版萬葉集』（本文篇）佐竹昭広・木下正俊・小島憲之編、塙書房、1998 年
『竹取物語』片桐洋一校注、日本古典文学全集、小学館、1972 年
『伊勢物語』福井貞助校注、日本古典文学全集、小学館、1972 年
『大和物語』安部俊子・今井源衛校注、日本古典文学大系、岩波書店、1957 年
『宇津保物語（一～三）』河野多麻校注、日本古典文学大系、岩波書店、1959～1962 年
『源氏物語（一～六）』阿部秋生・秋山　虔・今井源衛校注、日本古典文学全集、小学館、1970～1976 年
『枕草子』池田亀鑑・岸上慎二校注、日本古典文学大系、岩波書店、1958 年
『狭衣物語』三谷栄一、関根慶子校注、日本古典文学大系、 岩波書店、1965 年
『濱松中納言物語』松尾聰校注、日本古典文学大系、岩波書店、1964 年
『今昔物語集（一～五）』山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注、日本古典文学大系、岩波書店、1959～1963 年
『今昔物語本朝世俗部一～四』阪倉篤義・本田義憲・川端善明校注、新潮日本古典集成、新潮社、1978～1984 年
『延慶本平家物語』（本文篇）北原保雄・小川栄一編、勉誠社、1990 年
『平家物語（上・下）』（龍大本）高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注、日本古典文学大系、岩波書店、1959 年
『史記桃源抄の研究本文篇（一～五）』亀井孝・水沢利忠校注、丸善書店、1965～1973 年
『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇（上中下）』池田廣司・北原保雄校注、表現社、1972 年
『文禄二年耶蘇會版伊曾保物語』濱田　敦・柊　源一校注、京都大学国文学会、1963 年

『好色一代男』板坂　元校注、日本古典文学大系、岩波書店、1957年
『近世白話小説翻訳集(一～十三)』中村幸彦編、汲古書院、1984～1988年
『江戸小咄』興津　要編、講談社文庫、講談社、1973年
『江戸小咄(続)』興津　要編、講談社文庫、講談社、1976年
『江戸小咄集(一・二)』宮尾しげを編、東洋文庫、平凡社、1971年
『軽口本集』武藤禎夫編、岩波文庫、岩波書店、1987年
『小咄本集』武藤禎夫編、岩波文庫、岩波書店、1987年
『落語本集』武藤禎夫編、岩波文庫、岩波書店、1988年
『怪談牡丹燈籠』三遊亭円朝作、『三遊亭円朝全集1怪談噺』角川書店所収、1975年
『真景累ケ淵』三遊亭円朝作、『三遊亭円朝全集1怪談噺』角川書店所収、1975年
『口演速記明治大正落語集成(第一巻)』暉峻康隆・興津　要・榎本滋民編, 講談社、1980年

索引・辞書

『九本対照竹取翁物語語彙索引』（本文編・索引編）上坂信男編、笠間書院、1980 年
『伊勢物語総索引』大野　晋・辛島稔子編、明治書院、1972 年
『宇津保物語本文と索引』（索引編）宇津保物語研究会（代表：笹渕友一）、1975 年
『狭衣物語語彙索引』塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子編、笠間書院、1975 年
『濱松中納言物語総索引』池田利夫編、武蔵野書院、1964 年
『延慶本平家物語』（索引篇）北原保雄・小川栄一編、勉誠社、1996 年
『平家物語総索引』金田一春彦他編、学習研究社、1973 年
『エソポのハブラス本文と総索引』大塚光信・来田　隆編、清文堂、1999 年
『大蔵虎明本狂言集総索引(1～8)』北原保雄他編、武蔵野書院、1982～1989 年
『雑兵物語研究と総索引』深井一郎編、武蔵野書院、1973 年
『柳髪新話浮世床総索引』稲垣正幸・山口　豊編、武蔵野書院、1983 年
『金文編』容　庚編、張振林、馬國権補、中華書局、1985 年
『類聚名義抄』正宗敦夫校訂、風間書房、1954 年
『清原宣賢自筆伊路波分類體辭書　塵芥』京都大學文學部國語國文學研究室編、京都大學國文學會、1972 年
『慶長三年耶蘇會板　落葉集』（本文・解題・索引）京都大學文學部國語國文學研究室編、京都大學國文學會、1962 年
『日本大文典』（J. ロドリゲス）土井忠生訳注、三省堂、1955 年
『邦訳日葡辞書』土井忠生・森田　武・長南　実訳、岩波書店、1980 年

附記：

本研究を遂行するにあたり、財団法人新村出記念財団（理事長：壽岳章子）より第十七回研究助成金の交付を受けた。記して感謝を申し上げたい。

Summary

The History of Japanese '*kare*' and its Related Phenomena

Changbo LI

This paper discusses the history of the Japanese third person pronoun '*kare*' and related phenomena, especially from the viewpoint of the contact between ancient Chinese and Japanese. It also defines the sources and the acquisition process of the third person pronoun in Japanese. The main points of this paper are as follows:

1) We notice parallel phenomena in the system of demonstratives of ancient Chinese and ancient Japanese. That is, it's structure can be captured by the opposition of 'first person vs. non-first person'.

2) Because the structure of the system of demonstratives was the opposition of 'first person vs. non-first person', the diversion of the third person pronoun '*kare*' and '*are*' from the non-first person demonstratives was used as a 'non-first person pronoun'. That is, it was not used for the antecedent concerning the third person only, but for the listener, in other words, the second person. This is the prestage of the establishment of the third person pronoun '*kare*' in Japanese.

3) We can find an earlier usage of the third person pronoun '*kare*' in the translation of 'ESOPONO FABLAS' of A.D. 1593, because the parallel use of '*kare*' for the second person was not found at that time, and '*kare*' had retreated from the demonstrative system.

4) In the Edo period, the third person pronoun '*kare*' was not used in colloquial Japanese, but the diversion of third person pronoun '*are*' from the demonstratives was used. And in the 'yomihon(読本)', 'tuzokumono(通俗物)'(the translation or adaptation of colloquial Chinese novels), the third person pronoun '*kare*' was used frequently. This is the main source of the '*kare*' used to indicate the third person singular of the male in contemporary Japanese.